# 聞き手とのコミュニケーションのある発表指導

## ―「授業」形式の発表活動―

高橋　純子

**要　旨**

本稿は、上級及び中上級レベルの日本語学習者を対象とした聞き手とのコミュニケーションのある発表指導の実践報告である。このレベルの学習者はほとんど、既にプレゼンテーションを経験したことがあるが、聞き手の存在を考慮しないかのような一方的発表に終始してしまう者も見受けられる。著者は「授業をする」という活動を実施し、聞き手とのコミュニケーションスキル向上を目指した。「授業」のまとめとなる小テストの作成および採点、「授業」の内容と自己評価を最終レポートとして提出することを課した。また、発表者が落ち着いて、力を十分発揮できるよう親和的雰囲気を構築することに注意した。その結果、授業者、つまり発表者の態度および聞き手の反応も一方的なものから、双方向的なものに変わっていったことが観察された。

【キーワード】「授業」という名の発表活動　聞き手とのコミュニケーション　小テスト
親和的場の構築　双方向性　自己評価レポート

# Instruction for Communicative Presentation Skills: A "Lecture" by Students

TAKAHASHI Junko

【Abstract】This is a report on instruction for communicative presentation skills in several advanced and pre-advanced Japanese language as a foreign language classes. Most of the students of this proficiency level have already made several presentations in Japanese. However, some of them tend to ignore the listeners, or they do not yet have the necessary skills to be good communicative presenters. The author assigned them an activity to ① make a lecture on a subject they are knowledgeable about, ② prepare and mark a small test on their lecture, and ③ submit a final report on their lecture topic and self-evaluation of their presentation. The author also paid attention to create a supportive atmosphere among the students so that their "lectures" would be successful. As a result, it was observed that the presenters' approach and the listeners' reactions became more bilateral.

【Keywords】presentation named a lecture, communicative presentation, small test, supportive atmosphere, interaction, self-evaluation

## １．はじめに

中上級日本語学習者になると、それまでの日本語学習過程において既にあらたまった場でのスピーチや発表を経験している者が少なくない。このレベルの学習者のスピーチや発表の要改善点の１つとして、聞き手とのコミュニケーションスキルがあげられる。筆者は、聞き手とのコミュニケーションスキルを磨く目的で「授業」という形式で発表するという課題を課した。この活動は、筑波大学留学生センターでの予備教育中級クラス（2008年２学期）、及び学部学生を対象にした演習２のクラス（2007年２学期、2010年１学期）と他大学の学部学生を対象にした総合というクラス（2009年前期、2010年前期）で実施した。本稿では、筑波大学留学生センターにおける３つの授業での特徴的だった点を報告する。

## ２．よい発表、よいスピーチとは何か

あらたまった場における口頭発表能力を養成する目的の授業では、まず学習者にいいスピーチ、いい発表とはどんなものかを問う。大きい声で話す、正しい発音、アクセント、イントネーションに注意する、正しい文法、表現、語彙を使う、聞き手を見て話す、いい姿勢で話す、適当な間合いをとる、ユーモアを交えて、興味をひきつけるような話し方で話す、ハンドアウトを準備する、パワーポイントや図、表、写真など視覚資料を準備する、など的確な答えが返ってくる。悪い例について尋ねると、原稿を読む、聞いている人を見ていない、声が小さい、資料がない、など欠点をあげることができる。さらに、なぜ悪い発表になってしまうのか、という質問には、準備不足、時間が足りない、慣れていない、日本語の力がない、などと答えが返ってくる。改善するためにはどうすればいいかと尋ねると、よく準備をして練習をすること、と答える。

学習者たちは、それまでの経験から何がいいスピーチ、発表かを学んできている。そして、今、またさらに向上を目指して授業を受けるわけである。演習２の授業では、以下の学習目標を設定した。

・聞き手とのコミュニケーションがとれるようになる。
・聞き手の反応を見ながら話を進めることができるようになる。
・構成を考える。論理的順序で話を進めることができるようになる。
・発表の態度、目線、姿勢、間合いの取り方などに注意できるようになる。
・声の大きさ、発音の明瞭さ、イントネーション、アクセントなどに注意できるようになる。
・わかりやすくするための工夫ができる。（図、グラフ、写真など視覚資料の使用）
・「授業（発表）」の前に練習を十分するようになる。

## ３．学習者の課題への取り組み

学習者のスピーチ、発表への取り組む姿勢は一様ではない。自身の日本語口頭表現能力向上を目指し、その手段の１つとしてスピーチや発表活動を位置づけ、積極的に取り組む学習者もいれば、そのような自覚に欠け、義務的に取り組んでいる者もいる。

後者のタイプの学習者でもクラスメートの自律的学習者からも、また反面教師として自律的でない学習者からも何かしら学んでいくもののようである。上述したよいスピーチ、よい発表とは何かに答えられることがその理由である。

## ４．「授業」形式の発表の進め方

### ４．１　学習者同士の親和的関係、雰囲気の構築

敵対的雰囲気、あるいは聞き手の無関心が感じられるような場で、話を続けるのは誰にとっても苦痛であろう。聞き手が聞く姿勢、関心を示すことで発表者、以下「授業者」と呼ぶ、は落ち着いて十分力を出すことができる。

新学期が始まり、各所から集まってきた、見知らぬ学生を前にして「授業をする」ということは避けたい。学生同士が知り合う活動を準備し、顔なじみの関係を構築することから始める。筆者は、２人１組で、人数の合わない時は３人１組で、互いに情報交換した後、全体の前で相手を紹介する活動や、３～４人のグループで１分スピーチを行い、各スピーチの後、質疑応答をし、全員が一通りスピーチし終わったら、グループを再編し、１分スピーチを続けて行く、などの活動を取り入れている。

### ４．２　ロールプレイ

「授業をする」のはロールプレイをすることと共通点が多い。親和的関係を確保した後、聞き手となる学習者は、「学生」としての役割を果たすように、それも積極的な模範的な良い学生の役をするように、そして、「授業者」に対しては、与えられた時間は教師として責任を持って管理するよう指示する。

### ４．３　「授業」の学習目標と小テスト

「授業」の学習目標を設定し、その目標を「学生」が達成したか否かを測定する小テストを作成し、実施、採点することを課した。こうすることで、「授業者」は「授業」で何を伝えたいのかを明確にすることができ、授業の展開が見えてくる。

### ４．４　学習者同士の評価コメント

2007年２学期演習２、2008年２学期予備教育中級クラスでは、学習者による各「授業」への評価コメントを集め、翌週のクラスでそのコメント一覧のコピーを配布し、フィード

バックした。

### 4．5　学期末レポート

2010年１学期の演習２のクラスでは「授業」形式の発表を振り返り、以下の内容を記述したレポート提出を課した。

1）このテーマを選んだ理由
2）授業の学習目標
3）使用した教材：資料、参考文献、参考ウェブページのURLなど
4）使用した教具：パワーポイント、図、表、写真、実物、ホワイトボードなど
5）授業の内容：「授業」で伝えたことの要約
6）自己評価：演習２の授業の学習目標をどのくらい達成できたか。
・聞き手とのコミュニケーションがとれるようになる。
・聞き手の反応を見ながら話を進めることができるようになる。
・構成を考える。論理的順序で話を進めることができるようになる。
・発表の態度、目線、姿勢、間合いの取り方などに注意できるようになる。
・声の大きさ、発音の明瞭さ、イントネーション、アクセントなどに注意できるようになる。
・わかりやすくするための工夫ができる。（図、グラフ、写真など視覚資料の使用）
・「授業（発表）」の前に練習を十分するようになる。
7）特に工夫をした点
8）小テストは「授業」の学習目標達成を測るものであったか。
9）テスト結果の分析
10）まとめと今後の改善点、その具体的改善策

## ５．「授業」のテーマとその評価

### ５．１　2008年２学期　予備教育中級クラス　「授業」のテーマと「授業者」

・アメリカでの留学生活（アメリカ人研究生１名）
・スーパーマリオの研究（日韓生１名）
・韓国と中国の世界遺産（中国、韓国教員研修生２名）
・天文学（セルビア研究生１名、日韓生２名）
・韓国の花札（日韓生３名）

１名で「授業をする」場合と１つのテーマを２名、３名で分担して「授業をする」場合とがあった。その選択は学習者にまかせた。１人の持ち時間は質疑応答も含め、だいたい15分で、３人であれば45分ほど使える。

「授業」という形態を課したことによって、その構成に画期的変化を見せたのが「アメリカでの留学生活」の「授業」であった。学習者は、始め「情報提供型」の発表形式を計画していたが、教師のアドバイスも入れ、クイズ形式の構成に改めた。アメリカで一番留学生が多い国はどこか、中国、インド、韓国の中から「学生」たちに選ばせるなど、一方的な情報伝達ではなく、学生を巻き込んでの「授業」になった。「天文学」の「授業」は趣味の粋を越えた「授業者」の深い知識を披露する場となり、聞き手とのコミュニケーションという面より、むしろ本格的な「授業」の様相を見せていた。教員研修生２名による「中国と韓国の世界遺産」は、「授業者」が２名とも現職教師であったが、準備は徹底しており、時間内に収まらないものはすっきり整理し、省略するなど手際の良さを見せていた。

一方、日韓生に関しては、日本語の表現力、知識面で振るわなかった。「スーパーマリオの研究」ではコンピュータの操作用語、「韓国の花札」では花札で遊ぶときの「裏返す」「めくる」「切る」「合わせる」「捨てる」など独特の表現を使い切れなかったのがその原因の１つであろうか。

このクラスでは、学習者同士の評価コメントを書かせたが、「良かった」という称賛のコメントが多数を占めていた。一方、鋭い観察で教師のフィードバックをすべて代弁するものも少なくなかった。例えば、以下のようなコメントが「学生」としての学習者から寄せられた。教師はそれらを集め、コピー配布して、クラス全体でフィードバックを行うことができた。

・ペースがちょっと遅かった。
・時間のことを考えておいた方がいい。
・不適切な表現があったし、いろいろなテーマがばらばらだったのは、少しおしかった。
・言葉が難しかった。語彙リストがほしかった。
・「日本語でわからない」とよく言いました。もうちょっと調べたほうがいい。
・聞いている人とのコミュニケーションがなかった。
・聞き手が参加できるようなところがあったら、もっと面白いでしょう。
・グループで協力したほうがいいと思う。
・発音はもっとわかりやすかったらいいと思いますよ。
・文法のまちがいを直したらもっとわかりやすくなると思います。

### 5．2　2007年２学期　演習２　「授業」のテーマと「授業者」

・つくばについて（中国１名）
・ウズベキスタンの生活（ウズベキスタン２名）
・日本の最近の政治（中国１名）
・アリの生活（中国１名）

・心理学　―体格と性格―（中国１名）
・日本の政治制度（韓国１名）
・中央アジア学（カザフスタン１名）
・京都旅行（中国１名）
・海外旅行と留学（中国１名）
・未来社会（韓国１名）
・ドリフト（韓国１名）

このクラスに見られた特徴は、全体的に授業者の知識と「授業」とのバランスがよくなかったところであった。力が入りすぎたためか、政治関係のテーマを扱ったものなど授業者のその時点での日本語レベルでは説明が困難な内容のものがいくつかあった。授業者は自分自身がそのテーマについて知りたい、調べてみたいという動機で選んだというが、人に教える、伝えるまでに知識を咀嚼し、消化するのは難しい。一方で、旅行時の写真を見せて観光地の紹介、自身の旅行の思い出紹介という「授業」という形態にはふさわしくないものも見られた。

テーマとして何を選ばせ、深めていくかの指導が必要だと知らされたクラスであった。

### 5．3　2010年１学期　演習２　「授業」のテーマと「授業者」

・日本様式のプロダクトデザイン（タイ１名）
・北朝鮮対策（韓国３名、中国１名）
・ソ連時代（トルクメニスタン１名、カザフスタン１名、キルギス１名、ロシア１名）
・韓・日・中の漢字の違い（韓国２名、中国１名）
・自殺問題を考える（中国２名）
・現実生活と経済行動（中国２名）

このクラスでは、第１回目に旧ソビエト連邦の国々の学習者４名が熱の入った「授業」をしたことから、次からの学習者も周到な準備を心がけようとする態度が見られた。このグループの動機付けとなっていたのは、自分たちの国が属していたかつてのソ連邦に関してクラスメートである「学生」があまりにも知識がないことを知り、基礎的知識を伝えなければいけない、知ってもらいたい、という思いからであったようだ。

さらに、北朝鮮対策について「授業」をしたグループも2010年５月に韓国の軍艦「天安艦」が北朝鮮の攻撃を受けるという事件があり、それがきっかけで多くの人に北朝鮮問題に関心を持ってもらいたいという強い動機付けが見られた。このグループは、「授業」の学習目標の１つとして「韓国の天安艦事件をよく説明できるように」をあげているのだが、これは、「授業」を受ける「学生」だけではなく「授業者」自身が日本語で他国の人々に

説明できるようになる、という目標でもあるという。2007年の演習２の学習者にも見られたが、授業者自身がどんな内容のことを自分で話せるようになりたいのか、という理由からのテーマ選択であった。

## ６．「授業」形式の発表の効果

### ６．１　教師への視線を聞き手へ

**３．学習者の課題への取り組み**、で述べた「（課題を課せられて）義務的に」という姿勢で取り組む学習者も100％そのように意識している訳ではなく、そういう傾向がやや強い程度のように見える。そのような学習者はスピーチ、発表で教師の存在、評価の方をより意識し、聞き手、聴衆の存在を軽視しがちのようだ。「授業をする」ということで学習者は自分の担当する時間に責任を持たざるを得ない状況に置かれる。聴衆を退屈させてはいけないのである。教師へ向かっていた目線を、「学生」となるクラスメートに向けさせると言う働きが「授業」形式の発表にはあるのではないだろうか。

### ６．２　聞き手とのコミュニケーションの活発化

「授業」という形態をとることで、「発表」という名のもとでは一方的情報提供とそれに続く質疑応答で完結しがちだった活動が、授業者が聞き手である「学生」に質問を投げかけるという形で展開していく。筆者は、従来の発表指導で「これは一体どうしてなのでしょうか」「～ということを考えたことはありませんか」「皆さんだったらどうしますか」など修辞的疑問文を挿入するよう促したが、学習者は、それらの表現をなかなか使い切れなかった。しかし、修辞的疑問文ではなく、真の疑問文は使い易いようだ。学習者がこの演習２の授業を離れ、将来、自分の専門分野の研究や仕事の場で、いわゆる「プレゼン」を行う際に、聞き手に話しかける感覚を身につけていれば、それは役に立つはずだ。スピーチや発表の成功体験を重ねることで、学習者は自信をつけ、聞き手を配慮したスピーチや発表ができるようになるのではないだろうか。

### ６．３　成長：自立と責任

近年、何事にも教師からの指示に頼る学習者が増えてきているような印象を持つ。テーマ選択や展開の仕方など、教師はアドバイスはするが、決定し、実行するのはあくまでも学習者である。少なくとも、与えられた「授業時間」の活動の制御は、授業者にかかっている。「授業」という形式の発表は、ロールプレイに類似しているが、教師として学生の前に立ち、その役を演じていくことで自立し、責任を持って「授業」を展開していく感覚が身につくことが期待される。「授業をする」という活動では、学生として発表するのではなく、「教師」としての役割を与えられて発表するのである。そのいつもの自分を離れ

るという体験がどうのように作用するのか、探ってみたいところでもある。

何人かの学習者が「授業」形式の発表の期末レポートに書いてきた反省として、以下のようなものがある。

・聞き手が自分たちのテーマについてどのくらい知識があるのか知らずに、勝手に想定して説明をすると、自分１人で説明していることになる。聞き手がどの程度知識があるのか「授業」する人は認識しなければならない。

・自分が知っていても他のみんなは知らないことを認識しなければならない。

相手の立場を理解し、聞き手を配慮した情報伝達をしなければならない、という成長が見られた。

## ７．問題点と今後の課題

### ７．１　テーマの選択

6.2で述べたように、筆者は学習者にスピーチ、発表の成功体験をさせ、それが自信につながり、さらに高度な口頭表現能力を身につけていってもらいたいと授業を設計している。そのため、テーマ選びも学習者が知識としても言語的にも制御できるものを選ばせたいと思うのだが、学習者は自分が話せるようになりたい事柄で選ぶことも多い。意欲的態度で大いに奨励したいところだが、その加減が難しいと感じる。

学習者の年齢、それに伴う経験、知識の広さ、深さなどが影響を及ぼすのは、この「授業」形式の発表に限らないが、やはりある程度スピーチ、発表経験がある学習者を対象にした方が効果があるようだ。クラスの学習者構成にもよるが、他の学生があまりにも深い内容の「授業」をすると、自身の「授業」の内容と比較し、ストレスを感じる学習者もいるようである。「授業」の中で、「〇〇さんに比べると準備不足ですが」などの言い訳が多く聞かれることがある。学習者が委縮してしまうのである。反対にいい刺激を受け、力を発揮する学習者もいる。自分の得意分野、国の歴史についてなど知ってもらいたいことについて「教師の立場」を十分利用して発表をする学習者もいる。2007年２学期の「アリの生活」というタイトルでアリの生態を紹介したものであったが、聞き手に問いかけながら、その実態を明らかにしていくという興味深い「授業」になった。この「授業」発表は他の学習者にいい影響を与えたようだ。

### ７．２　テスト作成

小テストを作成するのは「授業者」にとっては、筆者が予想していたより難しかったようである。学習者にテスト作成をさせてみると、選択肢問題を作るのが苦手なようであった。テスト作成が簡単な記述式質問が多かった。〇×問題の作成はさらに難しいようであった。確かに間違った選択文を考え出すのは難しい。

全般にテストの指示文、質問文が適切に書けていないという発見があった。テストには慣れているはずの学習者が、実は指示文などの文体「正しいものに〇を、間違っているものに×を書きなさい」の「～なさい」、「下の□の中から選べ」などの「命令形」など自ら使用する機会があまりないのではないかと気がついた。

また学習者の「授業」中、しばしば、「これはテストに出ます。よく聞いてください」という指示が出された。学習者が大学で受けている授業の様子が垣間見られた。

### 7.3　簡潔さ

本活動に限ったことではないが、簡潔に話すことができず、時間内に「授業」が終わらないことがしばしばあった。自分の能力を超えた「授業」ではなく、適量の内容であろうと予測したにもかかわらず、時間を超えてしまう。準備不足、練習不足が直接の原因ではあるが、「簡潔さ」に欠ける。丁寧さを意識してのことだろうか、言い切る表現が少ないという印象を持った。「と思います」「～んじゃないでしょうか」「～と考えられる/　言えるのかもしれません」など口頭表現の授業で、その使用を奨励される文末表現ではあるが、それらが、「授業」では不適切に響くことがあった。この文体についてさらに観察、考察を進めていきたい。

「簡潔に話す」はおそらく母語話者にとっても永遠のテーマであろう。しかし、さらなる口頭表現能力の向上を目指すのであればその訓練も必要だ。筆者の担当する演習２のシラバスでは、前期にこのようなスピーチ、発表活動を中心にし、後期は事実を述べ、自分の意見、見解を述べる、という意見発表を行い、さらにディベートへと繋げていく。4.1でも述べたが、クラスに親和的雰囲気を築くための活動として１分スピーチに10分ぐらい割いている。短い時間で必要なことを述べる練習には効果があると見ている。制限時間内で理由を述べ、意見主張をしなければならないディベートの訓練には、特に適している。聞き手とのコミュニケーションがある「授業」という形式の発表の環境作りとして採用したが、１分スピーチの「簡潔に話す」ことへの貢献も考察していきたいと考える。

### 参考文献

高橋純子（1998）「あらたまった場での口頭表現能力を養成する教室活動」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5 No.1

齊藤孝（2009）『１分で大切なことを伝える技術』PHP新書